



第2分科会

第1分散会

I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、協力者から次のように呼び掛けられた。「本年は、全同教結成から70年という節目の年、結成に参画した先輩方の思いと願いを受け継ぐとともに、人権教育のさらなる進化と発展を図る大会にしていきたい。差別をなくし、すべての人々が安心して暮らしていくことのできる社会をめざす様々な取組が進んできたことは事実だが、反面、今、社会には、偏見に満ちた噂、根拠のないデマ、マイノリティの人たちへの攻撃など、人権を否定する不寛容な風潮が広がっている。また、経済的格差の拡大によって、未来を奪われている人たちがいる。—(中略)—本分散会では、参加者一人ひとりの実践や経験を重ね合い、すべての人たちが部落問題をはじめとする人権問題を「自分事」として捉え、その解決に向けた具体的な討議が進められることを期待する。」

この後、討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—④

差別に負けない生き方を仲間とともに

(新潟県同教)

—主な質疑と意見—

京都 交流会はどのくらいの頻度で開催されているのか。どんな人たちが集まっているのか。またSNS上ではどのような交流を行っているのか。

報告者 交流会は月1回をめざしており、今年度は4回開催した。参加者について、高校を中心に声かけをしていて、セクシャルマイノリティ、友だち、家族、支えとなる人、教職員等、オープンにしている。ラインのグループを使っている。そこで質問が出され、それに対して返したり返さなかったりである。

熊本 交流会での話題はどんな内容なのか。

報告者 「セクシャルマイノリティ」交流会と頭についているが、家族の悩み、介護、老後、障がい者、部落問題の授業実践なども話題に上がる。

熊本 Yさんの「職場での差別的な発言」にどのよ

うに返したのか。また、Sさんはどんな思いで「自分が差別者になってしまうのも怖い」と話したのか。
報告者 Yさんではなく、私の職場での話である。性教育を男女別に行うということに対して「なぜか」と問うたところ、ある人が「最近はいろいろ難しいな」と言ったので、「昔からいろいろ難しいんですよ」と返した。Sさんについて、交流会に参加して仲間ができたことが嬉しかった。先日は高校での学習にパネラーの一人として高校生の前で話をした。東京 子どもたちが学び、つらい経験も話していく中で整理されていったことが印象的であった。個人を変えることはできている。この先の展望を、いかに社会を変えていくかを考えると、理想としてどんなことが視野に入っていくのか。

報告者 持ち込み資料にみられる課題がある。理想がなければ変わらない。社会を変えなければ差別はなくなる。社会を変えるためには仲間をつくりたい。一方で「自分は自分でひっそりと」という考えも大切にしたい。

新潟 Yさんは曲作りについて、私のことを音楽の師匠と呼んでいる。はじめはメロディのこと等音楽に関する堅い質問や相談だった。「自分の好きなように作ったらよいよ」と伝えていたが、新井さんとのやり取りの中で作る曲も変わっていった。Yさんの曲は心の思い、叫びがメロディに乗っていて理論ではない。Yさん自身が悩んでいた時と同じ人が作っているとは思えない。歌をYouTubeにアップしている。見て共感する人が増えていく。それが社会を変えていくことにつながるのではないかな。大きな出発点であった。

京都 新井さんが主役になっていないか。子どもどうしがつながっていくことが大事である。子どもたちが広げていく。自分たちが声を上げてもいいと気づく。教員が子どもから学び変わる、学校が変わる、社会が変わる。これが自主活動の意義である。新井さん頑張りすぎではないか。

報告者 自分の知らないところで子どもたちはつながっている。Yさんの歌がMさんにはまってしまい、立ち上がれないほどに「自分の曲」になっている。このレポートはみんなに見てもらった。TさんはMさんの「パズルのピース」の話に共感し、返している。「全部ひっくるめて今の私がある。今度は誰かの助けになりたい」と話している。交流会で支え合いたい。教員は参加しているが自己紹介の後は何もしていない。自分の知らないところでたくさんつながりができている。

奈良 新潟で生まれ育った。奈良、新潟の両方の視点で人権教育を考えている。性と制服等の服装が異なっていると思われる生徒はいなかったか。また、新潟は南北に長い。参加者の分布やどれほどの規模でどのようにして行っているのか。

報告者 制服をはじめ「自分の扱いを変えてほしい」という訴えは、それぞれが自分の場所で頑張っている。交流会で元気をもらってそれぞれの場所に戻っていく。参加者は全県から来る。南を拠点とし

ていて、開催場所は複数ある。移動に時間がかかる場合もあるが、移動も楽しみにしている参加者もいる。

奈良 教員が当事者のことを知ることが大切。生徒のサポート、理解が必要。

報告者 「当事者」という言葉に引っ掛かりを感じる。性についてはすべての人が当事者である。声を上げやすい人、上げにくい人がある。現場の教師がどう見つけて、どうかかわっていくかが大切。社会を変えるには、まず学校を変えていく。身近なところから制度について問い直したいと思う。

東京 「人生のパズルのピース」の部分について、つらい体験をしても「結局パズルのピース」と言いくるめられてしまう可能性(危うさ)がある。現実の難しさからどう社会を変えていくか。「多様」の共通項とは、自分の心のもち様で何とかなるのか。自己責任ととらえるのではなく、国家や自治体に問うことではないか。Sさんの困難について、制度をどう変えていくか。差別禁止法のような法整備がなされていない。男性が女性風呂に入っていくことに対して司法上で差別問題が反映されていない。

京都 自分たちがやっている「交流会」に1回目から参加している人がいるので話してもらう。

大阪 高校時代(10数年前)に「交流会」に参加した。同世代の人にあったことがなかったが、交流会で会えてうれしかった。「ひとりじゃない」と思ったし情報をもらえる場でもあった。合宿では大人が寝た後、公園で話す中で、一步踏み込んだ話もできた。今の子どもたちも同じような悩みをもっているもやもやしていると思う。つながって成長して、恋愛の話をしたりお酒を飲んだりできるとうれしい。

東京 自分はトランス男性。「交流会」に2回目から参加している。今は東京でトランスジェンダーの小学生の子どもがいる保護者ともつながりがある。ご飯を一緒に作る、自己紹介をするというような場づくりをしているが、子どもが自分の悩みを言い出せる場をつくることの難しさを感じている。親どうしは話せるが、子どもどうしは難しい。

京都 先輩の姿を見て後輩が希望をもつこともある。元気をもらった子たちが社会を変えることにつながる。それは解放研、朝問研の営みと同じ。

大分 学校で人推担当をしている。制服を何とかしたいがなかなか進まない。学校を変えるヒントが欲しいと思い、この分散会に参加した。高校時代に苦しい思いをしていたことを話せなかったという教え子がいる。部落問題のように、交流会が拡がり全国的なネットワークになっていけば変わっていくのではないか。当事者の切実な思いを運動に反映していければいい。

熊本 長年大切にしてきたことは「差別の現実から深く学ぶ」。「学ぶ」とは自分が変容すること、変容した自分で子どもの前に立ち、ともになくしていこうという思いを共有すること。差別がきついことを受け止めるだけでなく、この実践を受け、自分がどう変わっていくか学校の中で、行政の中で実践し

たことを報告する。同和教育が運動となった。当事者だけでなく学んだ人がどう返していくのかを問い続けていた。新井さんがいなくなったとき、子どもたちがどうなるのかが心配になる。取組の積み重ねが大事。

熊本 「男だけど女の子」という子がいる。心の苦しみに寄り添っていこうとするが、学校でトイレなど一つとっても苦しんでいる。一人で着替えるしかできない。教員として、その子に何ができるのか、どうやって同じような子とつないでいこうか、交流会が京都や新潟にあって熊本にもあったらと思う。一緒に活動できたらと思う。

大阪 夜間中学に通う80代の人がある。10代のときに受けたいじめ、差別の体験を少しずつ語り始めた。いじめは他人事であったがその人と知り合って変わった。夜間中学(に通う生徒)は年齢、国籍等様々。新聞やテレビの取材で発信していく。チラシ、ポスター等で広めている姿を社会へ少しずつでも発信し続けていくことで社会は変わる。

京都 「男だけど女の子」、この発想がその子を傷つける。「女の子なのに『男』と言われている」「男の子だからスカートをはけない」「女の子だから女の子と着替えたい」…。生まれたときに「男」「女」と言われたからそうっただけだ。

報告者 子どもたちどうしのつながりをもっと強く、もっともっと大切に作っていきたい。パートナーは「社会を変えるのは小さな革命だ」という。まずは自分、目の前にいる人。皆さんに伝わるのがあれば、それが社会を変えるきっかけになる。

－報告2－①

『『旭志に来てよかった』という思いが強くなりました』～この一年間の取組を振り返る中で～

(熊本県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 「アイロン事件」とは、どのような事件か。

報告者 旭志中学校では、体育祭で使ったりボンに、生徒が家庭から持ってきたアイロンを使ってアイロンがけをするが、1975年に、「〇〇(被差別地区)の子が持ってきたアイロンは使わない。」という生徒の発言があった。

東京 狭山事件は明らかな部落差別事件であり、1970代に教材化の動きがあった。狭山事件を扱うことで、生徒に何を考えさせたいのか。誰のどのような権利について考えさせたいのか。またそれは時代によって変わるのか。

報告者 石川一雄さんとの出会いから、狭山事件の教育的課題は、「教育の差別性」「学校の冷たさ」「学力の本質」であることを示してもらった。生徒たちには、厳しい部落差別があった時代の現実(報道

の影響の大きさとあからさまな差別)から、「仲間づくり」と「学ぶことの大切さ」について考えさせたい。裁判うんぬんではない。

東京 「第二の石川さん」を出してはいけない。部落の人々は、公正な裁判を受けることができず、公正な手続きを踏んで対応されることもなかった。文字が書けなくても、障がいがあっても、人は同じ権利をもっているが、石川さんはその不合理に気付くことができなかった。生徒には、司法権と個人の権利を一緒にして考えさせない方がよい。

福岡 (自主活動としての)集会で解放子ども会の子どもたちが人権について発表したが、集会の意図、形式、位置付けについて知りたい。

報告者 「5.23 校内人権集会」と「10.31 差別やいじめを許さず立ち向かっていく仲間としてつながる旭志っ子集会」がある。「5.23 校内人権集会」には、小学部6年も参加する。3月に狭山で現地調査を行った。中学部では、現地調査で学んだことを学年集会で報告し、その後、全校(校内人権集会)で報告した。また「10.31 狭山県民集会」というものがあるが、ある年から子どもたちの参加ができなくなったため、「10.31 旭志っ子集会」を開くようになった。ここでは中学生全員と小学5、6年生が参加し、解放子ども会からの発表がある。

京都 報告者は初めて「狭山熊本総決起集会」に参加したとき、「自信を持って歩くことができなかった」とあるが、それはなぜか。そして次の年には「堂々と」歩けるように変わったのはなぜか。

報告者 最初に参加した時は人権教育主任1年目であり、人目を気にしていた。知っている人がいたら、どのように見られているのかを気にしていた。コロナ禍で石川さんと手紙のやりとりをしたり、子どもたちと関わったりする中で、(部落差別を)自分の問題として捉えることができるようになった。

京都 子どもたちの高校進学後の姿はどうか。

報告者 日向は高校1年生。部活との両立が難しく、子ども会には参加できていない。熊本では支部で1か月に1度くらい集まっている。中学校までは仲間がいて、安心感があったが、高校ではいろんな子がいて(人権・同和教育に対する)温度差がある。これまで学んできたことを発揮できるか不安を感じている。

熊本 (日向とは)中学の時から関わっている。高校では校内人権集会を実施している。可能な範囲で活動したい。

福岡 日向は自分のことをどれくらい伝えることが

できているのか。どのようにして立場宣言ができる学校づくり、仲間づくりをしているのか。

報告者 日向は、学びたいという思いで、地区外から子ども会に参加している。1991年の差別事件を受けて、小学校1～3年では仲間づくりを、小学校4年では自立宣言を、小学校5年から中学校3年で「語る」学習をしている。いろんな立場の子が、自分のことを語れる学級づくりをしている。年度末には「進路公開」をし、自分のこれからの生き方を語り合っている。

熊本 これまで、自分を語ることを避けてきた。自分の家族のことを語りたくはなかった。しかし、担任が自分を見つめ、自分を語ることで、自分自身の差別性も明らかにすることができた。その姿を見ている子どもたちも後に続く。本気で綴って語り、本気で返すことが大切。自分の親を見つめ直し、自分自身を問い直すきっかけとなった。

福岡 2014年、人権・同和教育推進協議会総会でアンケートの裏へ差別落書きがあり、ショックを受けた。もっと真剣にいろんなことに取り組んでいかなければならないと、全教職員が自分のことを書いて見つめ直して、また取組を行っていった。当時の課長が「日常的にムラで豊かな出会いを」というキャッチフレーズを作って、人権学習に取り組んでいった。子ども会自主学习会は、コロナ禍で中断されていたが、再開するにあたって、経験したくない先生方もいる中で、その歴史や意義や大切にしてきたことなどを確認した。放課後の勤務時間外の任意の学習会だが、ほとんどの先生方が参加してくれてうれしかった。参加して自分が得たことを教職員自身が率直に語る事が大切だ。

－報告3－②

仲間とともに広げよう反差別の思い

～学校を超えて～(大阪府人連)

－主な質疑と意見－

福岡 「使ってはいけない言葉」と Aさんが言っていたが、普段の指導はどのように行っているのか。報告者 普段差別発言があったときは、その言葉を知った経緯を把握、分析し教育につなげている。その言葉がいけない背景について考えるようにしている。

福岡 差別落書きがあったときに、教育委員会や行政の対応はどうだったのか。

八尾市教委 怒りをおぼえる。委員会も関係機関と連携しているが、子どもたちが発信することで、周りも動くという考えから、子どもたちが発信すると

いう場を設定した。声を聴く、声をつなぐことで社会が動くという展望を持っている。

大分 差別落書きを知った経緯や地域との連携は。
報告者 地域の方から聞いた。地域とは常日頃から連携している。今回のことも「放っておけない」「何とかしましょう」と話をして進めていった。差別事象だけでなく、日頃から地域行事や子どものこと、校内学習のことについても日々いろいろな機会に相談している。

支部長 20年前、反差別集会を子どもたちと立ち上げた。当時、先生たちが泣きながら差別を訴える姿を見た。その時の思いが引き継がれている。地域の子どもたちともしっかり向き合ってもらいたいと考え、教育委員会にも子どもたちが発信できる場を作ってほしいと話した。

大阪 小中9年間を見越した部落問題学習はどのようにされているのか。

報告者 2小1中からきているので学びなおしをしている。生まれた地域に誇りをもってほしいと、地域の歴史をはじめとした歴史学習を行い、水平社博物館には毎年行っている。また、3年生には(卒業後に)差別学習と出会っていない他校の生徒とも出会うことを想定し、聞き取り学習を行っている。

桂小学校(桂中学校校区) 低学年では家族との出会い直し、中学年では街づくり、高学年ではどうやって生きていくか「桂小水平社宣言」といった取り組みを進めている。地域のプラスのことをまず伝えている。昔、仕事や集会で家に親がいない子に「あんたご飯食べたんか」とよその子どもでご飯を食べさせていた。集会があるときは関東炊きを作ってよその子にも食べさせていたという温かい地域のエピソードから、子どもたちは関東炊きをつくる体験もしている。

奈良 Aさんが教育委員会で伝えきれなかったこととは何か。

報告者 この子はムラで育ってきた中で、親や周りの人から伝えられてきたので、いろいろな思いをもっている。自分も知らず知らずのうちに人を傷つけることがある、といったことを振り返っていた。本当に伝えたいことを言うまでには時間がかかる。

奈良 周りの子の変容は。

報告者 特に大きな変化はなかった。差別事象については各担任から伝えた。解放研や生徒会の取り組みについては応援していた。そこから「自分たちも何かできないか」という機運が高まっていった。

高知 大橋さんの立場は何か。解放研のメンバーはムラの子どもたちなのか。新聞やポスター、横断幕のメッセージはどんな内容なのか。

大分 Bの「伝えない方がいいのでは」という考えが発信していくという立場が変わったがそのきっかけは。周りの子たちに大きな変化はなかったというが、どういう伝え方をしているのか。その中で、子どもたちが発信したメッセージが知りたい。

報告者 人権教育担当として解放研にもかかわっている。解放研の子どもたちは地区外の子どもの

方が多い。新聞には差別落書きにかかわって自分たちが調べたことなどに興味をもってもらえるようにレイアウトを工夫して作った。ポスターも興味をもってもらいやすいようにキャラクターを載せ、「言葉に責任を」と書いた。横断幕には「自由と人権を人々に～みんなちがって みんないい～」と書いた。今も正門に飾っている。

Bに対して、(差別語を)人に伝えるから差別が広がるのではなく、その言葉が差別をする言葉だと伝えることが大切であることや、以前の差別問題に取り組んでいった先輩たちの話をしていく中で変わっていった。

日頃からいろいろな人権学習をしている。周りの子たちは、今回も取り組んでいくのがあたりまえで、今回のことが特別ではなかった。

香川 Aの保護者の思いはどうか。

報告者 いつも応援してくれており、反差別集会も見に来てくれる。

大阪(Aの担任) 懇談や行事などで話すことが多かった。「本当によく頑張っていると思います」ということも話していた。Aは表現することに時間のかかる子ということで「ゆっくりでいいよ」と声をかけていた。

京都 子どもたちが闘ってきた経験は大切だが、日常化していく必要があると思う。子どもたちは何と闘ってきたと思うか。

報告者 Aはどのように伝えていくのか、Bは伝えていいのか、Cは中国にルーツがある子どもたちがコロナでしんどい思いをしていることなど自身と闘ってきたと思う。

大阪 私は今回の取組で刺激をうけた一人。「学習するから差別はなくなる」とそんな保護者の考えもあり「勝手に嫌われてるねんから、仲良くするのは無理やん」と言っていた子がいた。人権サークルに参加することにも保護者は反対していたが、丁寧に話をしてきた。反差別の集会に参加する中で「反差別の思いを持っている人がこんなにも多いねや」と活動を広げていった。一緒に活動をする中で保護者も変わっていった。反差別の集会を通して、行動する子が育っていき、その輪が広がっていった。

－報告4－③

「生きづらさ」を抱えた生徒の「居場所」

～人権福祉研究部～ (奈良県人教)

－主な質疑と意見－

福岡 元々解放研だったが、ムラの子はいるのか。部内で「パパ」「ママ」と呼ばれているのはなぜか。体は男性だが心は女性という言葉に気を付けたい。
報告者 LHRなどで部落問題学習をしているが、ムラの子を把握できていない。世話好きな2人に頼っていて、そう呼ばれている。MtF トランスジェ

ンダーを理解してもらえるように使った。

大阪 生徒 B の入部届の性別欄をなくすか任意にしてほしいという意見を受けて年度末に検討ということだが、もっと早く検討できないのか。

大分 生徒 C や D が ADHD からくる躁鬱とあるが、生きづらさからくる精神的な病気ではないのか。生活背景はどうか。

高知 生徒 B が作成した部活紹介動画の内容は。制服の在り方、トイレ、更衣室の配慮は。学校全体への好影響を与えているとあるが、周りの子は。

報告者 生徒 B の意見を聞いたのは部活登録が終わっている夏だった。すぐに対応すべきだ。生徒 C は失敗が多いことからの不安、テンションの上下が激しく、落ち込むと登校できない。生徒 D は親との関係性が良くない。母親が妹はかわいがるが、カミングアウトしたとき受け入れてもらえなかった。今は恋人が部員。SDGsにからめて部活の内容やコロナ禍でも活動してほしい願いを2分くらいの動画にした。制服はスカートかスラックスの選択で、多目的トイレや更衣室も違う部屋を対応している。担任にはカミングアウトしている。クラスメイトとの関係性やかかわりの中で理解が深まっている。

京都 トランス女性と呼ぶのがいい。私の学校は放送部が居場所となっている。本当はクラスに戻したい。校内で担任との連携はどうしているのか。

報告者 生徒 C は自分が副担任としてかかわっていた。部の生徒が多いクラスでは遅刻が増えるなど変化があれば担任と情報共有をしている。

東京 「生きづらさ」は抱えさせられているもの。ADHD から躁鬱、不登校、いじめや差別をされるのはされる側が原因か。クラスは被害者をどう捉えているのか。

大阪 中学1年から高校2年まで不登校で、自分の弱さや自分の中に原因があると思っていた。大学の解放研に入って仲間とつながり、学校の中に「生きづらさ」があることに気付いた。卒業後も安心して語ることで居場所である。

福岡 3年間クラス替えがないというのは3年間かけて集団づくりができるチャンスでもある。人権福祉部からの発信や班ノートなどの取組をしてはどうか。いつでも帰ってこられる居場所、他にもあること、見つけることを伝えていく。

大阪 熱中フォーラムに参加した生徒が「自分事」として共感し、身近な社会を変えていく。聾学校も参加していたが、自主的に筆談を行う等、生徒自身に力があることに気付かされた。

新潟 生きづらさを抱えさせられている子どもの居場所で吐き出しただけでなく、教室に戻り、社会につながる力、エンパワメントをどうつけるかが問われている。マイノリティに生まれたり闘わないといけない現実がある。

大阪 学校環境が生きづらくしているのではないか。中学校を卒業して通信制高校に行ってキラキラしている。勉強が楽しい、わからないことが聞け

る、友だちがいっぱいできたと聞いている。中学校の保健室では、「思っていることを言語化していくと相手に伝わるよ」と話していた。クラスに行けるとうれしい。クラスミーティングを重ね、学級の中に居場所ができると保健室から去っていく。

報告者 生徒Cは「今のクラスだったら行けた」と言っている。クラスの友だちと人権福祉研究部の仲間が学校に行けるようになったことにつながった。ペットボトルキャップゲームを小学校に配ってみてはという提案にやってみようかとやる気になっている。言葉や思いを表現し、就職し、社会に出て生き抜いてほしいという顧問としての願いがある。

Ⅲ 総括討論

(1日目)

熊本 私の学校の体育祭で女子はダンス、男子はソーランだが、トランス女性の生徒が「ダンスがしたい」と言った。生徒たちは受け入れていたのに学校は認めなかった。スカートで学校に行きたいという生徒。男女で分ける学校が生きづらさになっていると人権担当として研修を行った。生徒会からも制服を変えていく動きがあり、新しい制服に変えていった。

熊本 人権教育主任1年目。生徒から生徒会へあげて2年間で制服が変わった。スラックスとスカートと選べるが、男女の概念があり、スラックスを選ぶと性的マイノリティに見られるのが嫌という生徒がいた。返しがうまくできなかった。

大分 スカートをはきたいけどはけない空気が問題。ルールだけで解決しない。そこにある空気、気持ちを変えるのが大切だ。

福岡 社会を変えるのは教育啓発の場で発言することが一歩ではないか。

熊本 社会を変えるのは、自分を語ること、自分の足元を見つめることが大切だ。旭志小中集会では、解放子ども会の中学生からの訴え、一人ひとりの語りに、返しとして語っていく子どもの姿がある。教職員は、語りに返す子どもを育てるしかけや取組をすることが必要だ。

京都 自己開示は大切、でもしんどい。安心して語れる場所、仲間が必要だ。制服を変えることをトランスの子が求めているのか。

熊本 語る取組は自分の言いたくないことを受け止めてくれる学級づくりが大切だ。「卒業後もつながる仲間」が目標。高校をやめた子を元気づけるバーベキューで同級生30人が支えた。進学した高校の人権教育が足りないから生徒会長になって学校を変えたいという子もいる。

奈良 「ブレザー着たかったな」と学ランで卒業していった生徒、入学時より学ランで通った生徒がいる。スラックスを選択する生徒は1~2割だが、県教委が「その子が周りから何か言われぬか」心配

している。自分が小学3年生の時、体操服が男女一緒にあったり、男女混合名簿になったり、「～さん」で呼んだり…ジェンダーの問題、性的マイノリティの問題としてとらえている。

東京 自分が指導員でかかわっていたとき、子どもから「ぼくお父さんいないんだ」という投げかけに「ぼくもいないんだ」と返した。それから関係がよくなった経験がある。制服の強制は自己決定できないという点で人権侵害ではないか。

東京 中3の時トランス男性だと自覚した。与えられた制服でなく男女共用の体操服で過ごした。

京都 2つの性別カテゴリーがあるから制服になる。

熊本 の意見「卒業後もつながる仲間」だけでなく「卒業して新しい人間関係をつくる力」「周りの人間とつながる力」を付けることが必要だ。

熊本 小1のとき、旭志で目の前で差別事件が起きた。旭志小中集会は、子どもたちが始めた集会で、高校生になっても参加してきた。立場宣言は小4です。それまでの学習があるので、今も運動を続けている。私自身、結婚差別を受けた。差別と闘うのは命がけで、差別に負けるのは命を絶つことだ。人は変えられる。諦めずに関係を続けて、連れ合いの両親は自分たちを認めてくれた。出身を隠して生きていくことはしんどい。自分は差別されてきたが、いつ差別する側になるのかわからない。だからこのような勉強を続けていく必要がある。

(2日目)

奈良 ありのままの姿を出せる場がいろんなところにあるといい。生徒 C は特性から躁鬱になることもあると感じる。発達障がいメルトダウンという、強いパニックから感情のコントロールができなくなる。人権福祉研究部の日々の活動の内容について教えてほしい。

報告者(奈良) 月～木曜日の16:30～18:00頃、校外の清掃やペットボトルの洗浄、ゲーム、おしゃべり、テスト週間勉強会などの活動を行っている。生徒 C の保護者は C の理解と協力ができている。

高知 生徒 C が部長となるためにどんな働きかけをしたのか、ADHDとして気になる。

報告者(奈良) C は私が副担のクラスに復帰した。AとCの2人が3年生になってかかわっていた。

新潟 生きづらさを抱えさせる社会に出た時一人になる。社会と闘う当事者が誰かとつながれるかどうか、我々の立ち位置が問われている。

福岡 特別支援学級を担任したとき、登校しづらい子に出会った。神楽や神輿や神社が大好きだった。「神輿を作りたい」というので「なんで」と聞いた。「保育園や幼稚園に持って行って担がせてあげたい」という願いで神輿を作った。子どもたちがやってみようということが鍵で、ホッとできる場所があればよい。ADHDをラベリングするのではなく、ありのままを受け止めることが大切。

京都 朝文研活動で教師がお膳立てをして、子どもたちに必要な力をつけられていないのではないかと反省し、自分を消して子ども同士をつなぐように

変えた。すると、子ども一人で闘うのではなく、子どもが周りの子どもたちを変えていった。一人で闘うところから次のステップに行くにはカウンター活動が必要。教師自身の生き方が子どもに影響を与える。教師が出会いをコーディネートして、交流会でつながる中で社会を変えていく。

大阪 闘わなくていいなら闘わない。認めてくれる仲間や先生がいた。カミングアウトすると「あっそう。だから？」と気にせず接してくれた。交流会で一人じゃないとわかって、いろいろな人とつながることが楽しかった。

熊本 人権福祉研究部は隠し事をしないで素でいられる。旭志中の取組と似ている。言いたいけど言えない原因は何か、聞いてくれるだけで安心する。

大分 聞いてくれる人がいないと言語化できない。居づらさ、生きづらさ、その人のことばをありのまま受け入れる。将来に展望をもてるように、学力保障、進路保障の大切さを感じた。

熊本 人の生き方、子どもの姿、変わり目に研修で学び、職場にもどって伝える。差別の構造の根っこは同じ。部落問題がなくなれば変わっていく。一人ひとりの小さな革命が集まれば大きな革命になる。

熊本 卒業生が高校に行けていない。高校の人権教育担当と話をしているが十分かかわれていない。その子にとって何が必要なのか、自分自身何ができるのか考えた。

大阪 自分の立ち位置は「誰一人取り残さない社会をつくっていききたい」だが、現実には本当にできているのか。自分の言葉や立ち位置で自分が人を差別するかもしれないと思った。差別をする、しないでなくて、差別を許さないという姿勢を貫きたい。

(報告者より2日間の学びについて)

報告者(新潟) 負けないことは死なないこと。生きていだけで闘っている。交流会を用意して、子どもたちだけで交流する、つながっていく姿も多くあった。この2日間で学んだことは次の3つ。今以上に自主性、ゆとりをもって、子どもたちどうしがつながれる場所を用意すること。交流会でありのままの子どもたちの姿からの私自身の学びを教員に伝えていくこと。私自身が発言や行動で生き抜くこと。

報告者(熊本) 学習会で見せる姿が、学校では見せられていない。学校で子どもの思いを聞いているか、学習会と学校をつないでいるか問われた。自立とは人を頼ることも含めていろんな人とのつながり、頼る場所をつくっていくこと。自分自身を語りながら、自分なりの解放を続けていきたい。

報告者(大阪) 学級開きのとき、自分がいなくなっても子どもたちでやっていけるクラスを目指した。つながりはいいな、ありがたいな、豊かさにつながっているなと感じている。つながることで子どもたちがおもしろい楽しい思いを体験している。自分自身もつながってよかった思い出がいっぱいあるので、つながることを大切にしていきたい。

報告者(奈良) ADHDのことを伝えましたが、生徒C、

Dのことを話すのには必要だと思って発表した。「なんでこんなこともできないんだろう」と自分を責め続ける日々があった。人権福祉研究部の生徒とかかわれたこと、人権教育とかかわれたことで自分自身も認められた気がする。人権福祉研究部と検索するとうちの部の活動の様子がわかる。他の学校との交流も考えている。

(2日間のまとめ)

協力者 総括討論のなかでは、しんどい立場の子どもたちがその思いをことばにして語り、その思いを自分と重ね合わせて受け止め、真剣に返す仲間とのつながりや絆を深めること、また、ありのままの自分を語ることでできる人間関係の構築の必要性や居場所づくりの大切さが語られた。また、子どもたちが自分の力で他の子どもたちとつながろうとする力をもって、わたしたちが見守るなかで、まわりの人とつながり、新しい人間関係をつくる力(エンパワメント)をつける必要性も指摘された。共生社会の実現に向けて、わたしたち自身が、子どもや保護者に真剣に向き合う中で、自分の中にある人権認識を磨き、学び続けていく大切さ、立ち位置の大切さについても問われた。そして、何より人との出会い、かかわりが人を変えていく、その力、展望についても多く語られた。本大会に集ったわたしたちが、今大会で得たエネルギーを、そして課題を仲間として各地に持ち帰り、小さな革命として、明日からの実践、行動につなげていこう。